

中国少数民族の初期哲学における宇宙観概説

佟 徳富

はじめに

わが国の少数民族は、宇宙の本源について豊かな推測を行い、これを基礎として初期の哲学宇宙観の萌芽が形成された。本文はこれについてあらましを述べ、分析し、人類初期の哲学的思惟の特徴について研究を試みるものである。

キーワード 少数民族、宇宙観、万物の起源、萌芽

根源を追求するのは人類の知恵の天性である。古代、人類の思惟の発展程度は極めて低い段階に置かれてい

たとはいえ、ある重大な問題について探求し、思考することは好まれていた。例えば、天地は何によって始まったのか、宇宙の万物はどこから出て来たのかなど、当時の人々が答えられないほどの「世界の謎」がそうであった。人々を長期にわたって戸惑させたこれらの問題は、今日の哲学的宇宙観の根本問題と私たちが言っているものである。わが国の各民族の先民たちは、これらの問題についていろいろと天才的に推測し、答えてきた。その中には、豊富な哲学本体論の萌芽が孕まれていて、初期の哲学的宇宙観を形成していた。

一 宇宙の本源についての哲学的宇宙観

わが国の少数民族は、宇宙の本源について、豊かな推測を基礎として、初期の哲学的宇宙観の萌芽を形成していた。

(一) 「氣本源説」

天地は何によって始まったのか、宇宙の万物は何から出て来たのか、これらはどの民族の先民でもすべて答えようとした重要な問題である。わが国のプイ族、ナシ族、タイ族、ペー族などの民族の先民は、この問題に独特な答えを与え、「氣本源説」を提出した。例えば、プイ族の先民は、天地の万物が生じる前には世界にはだた清、濁二つの気があって、この二つの気体が進展変化して天と地になったと考えている。その『古歌』の中ではこう言っている。

清氣と濁氣とに分かれ、

清氣は「ひゅーっと」上へ立ち上り、

濁氣は「ぶすつと」下へ沈み、

清氣が立ち上ほって青い空になり、
濁氣が下に沈んで大地になった。⁽¹⁾

簡潔な言葉で重大な問題を答え、ただあるがままに言って、そのわけを言わない。これは初期人類の知恵の一大特徴であり、人類の思惟の発展が極めて低い段階に置かれていたことの必然的結果である。中国少数民族の初期哲学に見られる宇宙本源の答えは極めていい例証である。天地と万物の生成について、ナシ族はプイ族とよく似た「佳音」、「佳氣」説を提出した。すなわち、天、地はまだ定められず、日、月、星はまだ出現せず、山、川もまだ形成されていない時、「上の方に佳音が出て」、「下の方に佳氣が出て」、佳音と佳氣が結び付き、天、地、日、月、星を生み出したと考えている。⁽²⁾ この「佳音」は氣を指している。ナシ族の先民は、氣が流れて風を生み出し、風が吹いて声を発し、そして「佳音」は震動している「音声」の形式で存在している気だと考えている。ナシ族の先民は、この物質的な氣が二つに分かれ、上の方の「佳氣」は清であって蒸発し、軽い清氣が上がって陽氣になり、下の方の

「佳気」は濁っていて、下に沈んで陰気になると言っている。上下両方の気体がお互いに「交合」して、天地万物を生み出したのである。

タイ族先民の宇宙万物の起源についての回答は独特で、霧、気団、強風と水が本源であるという説を提出した。タイ族の創世史詩の初めでは、天地日月がまだ形成されず「鬼と神」がまだ出現していない時、ただ霧が動いていて、ただ気団が湧いて、ただ強風が渦巻いて、下には茫茫として白く光る大水³⁾だけだったと言っている。霧、気団、強風と水が集まって第一の大神、エイバ神を生み出した。ついで、エイバ神から天地が開闢し、万物を創造した。タイ族先民の意識の中には、宇宙の万物生成の過程がある。すなわち、霧、気団、強風と水、エイバ神、天地、万物である。だからタイ族の先民は、大神であるエイバ神の母は「気団」、父は「大風」と認めている。「気団が生命を与え、海水が血を供する」と。天地万物はエイバ神が造つたと認めても、史詩は、エイバ神の前にさらに原初の物質があり、エイバ神さえもこの原初物質から生成したと考

い泥は天になった。霧単は黒い泥を生じ、黒い泥は地になった⁵⁾、そして「天地はまた万物を生じた」と。この「霧単」は霧気、雲霧、水気を指している。ミャオ族の他の地区に流行している『古歌』の中には、いささか別の概念を用いて同じ思想を表したものがあつた。すなわち、「我々は古代を見ている。田を造り、地を造るのを見ている。霧単を思つたら喜ぶ。それが来て天地を生み出した。霧単を思つたら喜ぶ。それが来て地を生み出した。霧単と水気を思つたら喜ぶ。それらは天地を生み出した。日の出ずる高山を生み、水の出る地層を生み、地を生み田を開き、村寨を生み人家を生んだ⁶⁾」というものである。つまり、「霧単」にしても「水気」にしても、宇宙本源を探求する時、ミャオ族の先民はできるだけ自分のよく知っている具体的物質形態を原始物質だと考えたが、これは称賛すべきものだ。

イ族の先民は天地の起源を探求する時、霧露説を提出した。その『史詩』の中ではこう言っている。
霧露の一団だけがあつて、
霧露だけがとうとうと渦巻いている。

えているのは、実に称賛すべきものだ。
チュアン族の先民にも、民族的特色の濃厚な気本源説がある。例えば、『天地分家』神話の中ではこう言っている。すなわち、天地がまだ形成されていない時、一団の大气が回転していて、最後に一つの丸い卵の形になり、丸い卵型がはじけて三つに分かれ、一片は上の方へ飛んで天になり、一片は下の方、地底にまで沈んで海になり、真ん中に残つたのは大地になった⁴⁾。

(二) 霧、露、霧単説

宇宙万物の起源について、南西地区の民族は気本源説とよく似た見方を数多く提出した。その中で最も典型的なのは、ミャオ族の霧単説、イ族の霧露説、トン族の大霧説、ヤオ族の浮雲説などである。

天地と万物の起源を探求して、ミャオ族の先民は「霧単」だと推測した。『古歌』の中では、天地が生じる前、全世界にはただ一片、一団の霧気があつて、天地万物はこれが進展変化してできたのであると言っている。「霧単が生じたのは最も早く、霧単が白い泥を生じ、白

霧露のなかに天があつて、
霧露のなかに地がある……⁷⁾

ある史詩の中では、雲が原始物質と言っている。例えば『阿細的先基』の中では、天地がまだない時、ただ雲が二層に分かれて、「軽い雲は上へ飛び天になった」と言っている。そして、「重い雲が下に降りて地になった⁸⁾」。

トン族の先民は、大霧を原始物質とした。天地が混沌として未だ開闢する前、「大霧が被さっていた」と。後で、「雲散霧消して、天と地とに分かれた。天は高くなり、地は低くたれた。天は日月星辰を持ち、地は万物生靈を持った⁹⁾」と。イ族と同じく、天地は霧気が自然に進展し、変化してできたという思想を主張した。

(三) 混沌説

天地の起源の過程を探求するのに、混沌説は最も代表的で、かつ天才的な推測である。例えば、アチャン族の先民は「混沌」と「白光」は天地を開闢した万物の起源だと言つた。

天地が開闢する前、ただ「混沌」だけがあった。「混沌」の中には明暗の区別も、上下の区別もなく、まったく寄る辺がなく、非常に広く茫然として限りがなかった。「混沌」はどのように天地を生み出したのか？『史詩』には、「混沌の中から突然、白光がさつと流れ、白光が出たら暗黒も出てきた」とある。そして「暗黒が出たら、陰陽も出てきた。陰陽が相ついで生まれると、ツパマ天公とツミマ地母が生まれた」と言う。

イ族の史詩『勅俄特依』の中には、天地万物は混沌から進展変化したという見方について、詳しい描写がある。すなわち、「第一には混沌が水に変化し、第二には浄水が濁って満ちあふれ、第三には水が黄金色に変わり、第四には星が明るく閃光を發し、第五には星が閃光を發する間に声を出し、第六には声を出した後はふつうになり、第七には停頓した後変化し、第八には変化は激しさを増し、第九には下の部分はすっかり破壊され、第十には万物はすべてなくなるといふもので、これは天地変化史である」と。

トン族などの民族には、また「最初に混沌ありき」

は、「世界の初めは本無空であって、空から本有が起り、本有から真つ白な霜が生じ、次いで霜からヨーグルトみたいな露が生じた」と見ている。ここでは、混沌状態の「本無空」が進展変化して天地になり、また変化して万物になったと言っている。以上は、インド原始仏教にいくらかの影響を受けたが、チベット族の原始宗教、すなわちブン教に吸収され、改造された「自在天」の創世説である。

(五) 茶の葉は万物の「阿祖」

デーアン族の先民は、独特な茶の葉本源説で宇宙と万物の起源に答えた。

古代

大地は一片の渾濁だった。

水と泥が合わさり

土と石は分けられていなかった……

至るところに茶の木が茂っていた。かわせみのような茶の葉が対になって木を抱いている。茶の葉は茶の木の生命であって、茶の葉は万物の阿祖だった。

という、よく似た言い方がある。混沌とは何だろうか。民族ごとに史詩の解釈が違っている。アチャン族は「混沌」を「広く茫然として限りがない」空間と見、イ族は「原始物質」と見た。つまり、「明暗の区別がなく、上下の区別もなく、まったく寄る辺がない、非常に広く茫然として限りがない」空間と見ようとも、天地万物に変化する「原始物質」と見ようとも、すべて同じ特徴を持っていて、物質的な要素から天地万物の起源を解釈しようと試みたのである。

(四) 「卵生説」と「本無空」を源とする変化説

宇宙の起源を探索する過程で、チベット族の先民は「卵生説」と「本無空」本源説を提出した。チベット族の「黒頭矮子的起源」というブン教の経典は卵生説を提出し、「世界の初めは本無空であり、後から空が進展変化して鏡のような湖水が出現し、次いで卵を生じ、卵がかえって二羽の鳥が現れ、二羽の鳥が三つの卵を産み、三つの卵が変化して人類、天神、動物になった」と考えている。本無空を起源とした宇宙の変化の体系

デーアン族の先民は、自分の想像力と経験によって、大地と万物と人類が形成される前に、天がもう存在していたと思っていた。その時の天は茶の葉の生成する所である。天上には茶の木だけがあつて、茶の葉は茶の木の生命で、原始の物質である。それで、「茶の葉は万物の阿祖だ」と大胆に想像していた。この想像は幼稚で奇妙であっても、昔の人は、自分が知っているか、あるいは自分の生活と密接に関係している具体的物質から世界の本源的特徴を説明した。ゆえにそれは、物質本源説の哲学的本体論の価値と意義を持っている。

(六) 「二宗」本源説

アオ教とマニ教は、世界は二つの、それぞれ独立して互いに対立している本源があつて、善と悪、光明と暗黒は、この最も原初的な精神実体であると考えている。アオ教は、善と悪は宇宙の本源であるとみなしている。善の最高神はアコラマスダであつて、知恵と主宰の神であり、光明と清潔、そして創造などを代表している。人は善神が泥で造つたのである。悪の最高神

はアンカクラマンニユであり、暗黒と虚偽、劣悪そして愚昧を代表している。善と悪は互いに対立し、闘争し、最後には善が悪に勝つ。

マニ教は、光明と暗黒は隣りあつた二つの王国を造つていて、この二つは原初の存在であり、どちらも相手を創造しないし、消滅もさせず、全世界は光明と暗黒が互いに闘争しながら、力を合わせて創造したものだ、と考えている。アオ教の『聖書』である『阿維斯塔』とマニ教の經典である『摩尼教殘經』の中には、以上述べた『二宗』本源説が論じられている。

(七)「三壇」、「四素」、「五行説」

宇宙万物の起源を探求する時、中国少数民族の先民は、また比較的成熟した「三壇」、「四素」、「五行説」を提出した。十七世紀中頃、モンゴル族のすぐれた思想家であるサナンテツシンは、その史書である『蒙古源流』の中で、三壇論を用いて宇宙万物が生まれたことを解釈した。それでは、三壇は何を指しているのか？ その書物の中ではこう言っている。すなわち、

土、水、氣、火を本源とする説が流行して、民間の中でも四素に係する伝説と四素を尊敬する習慣があつた。例えば、赤土は生命と血を象徴しているから、人が死んだ後は赤土で保護される、と考えていた。水は、すべての病氣を治すことができる、と見られていて、民間には、沐浴した人は新しい生命を得たに等しい、¹⁵⁾ という言い方が流行していた。聖水を汚す者は罪を犯した、と彼らは深く信じていた。言い伝えによると、当時のシャーマンが一生結婚しないのは、水神の娘と恋をし、聖神を知己にした、ためだという。火は生命の重要な基礎であつて、民間には、火を尊敬し、礼拝する習慣が広く流行していた。氣は当時では呼吸と生命、氣候と季節に関連していた。これらすべては、早くも九姓烏古斯人の時代に、四素説が民間に広く流行していたのを説明している。十世紀中頃になると、ホウラビがこの思想を継承し、発展させ、有名な四素四性説を提出した。その大書である『科学綱領』の中には、こう説かれている。すなわち、我々は分類して述べるとしたら、それらは柔巴依詩体のように、火、

「三壇」というのは、端緒を開いた風壇、波を起こした水壇、これに依存する土壇を指している」と。この三壇は、どのように宇宙の万物を変化させたのか？ その書の初めの第一篇では、『具舍論』のモデルにより、天地万物の生成及び仏教の宇宙モデルを描いている。三壇はどこから来たのか？『蒙古源流』の答えは、虚空の中でしだいに形成された、というものである。すなわち、十方の空間の中で強風が吹き起こり、ついで風壇、土壇、水壇が生じた。サナンテツシンの本体論と宇宙モデル論はインド仏教の『須弥山中心説』の影響を受けた一種の仏教の宇宙理論であり、この理論はまたチベット仏教の影響を受けたのが明らかである。¹⁶⁾ とはいえ、私たちはその仏教の唯心主義の迷霧を払いのければ、やはりその中に物質本源説の要素を見つかることができる。古代のモンゴル族、チベット族が多く触れあつたのは風、土、水であり、それで彼らは、自分がよく知っていたり、自分の生活と密接に関係したりする自然物から、世界を解釈したのである。

早くも、九姓烏古斯人の時代、ウイグル族の中には、

氣、水、土から組み合わさり、その性質は、熱い、冷たい、湿つた、乾燥した、という四種に分けられる¹⁵⁾ と。十一世紀になると、ウイグル族の思想家ウソプ・ハス・ハジブはこの思想をさらに発展させ、その長編詩『福楽知恵』の中で、正義、幸福、知識、美德を「四つの良き友達」とたとえた。またそれを、宇宙を構成する四要素に比べられるとし、詩の言葉を用いて、四元素のように、この四つは私の良き友達であり、四元素が合わさると本当の命がある、と言った。これは独創的ではなくても、その表現形式には民族的特徴がある。これらの形象の比喩と適切な論述の中には、中央アジアの息づかいが濃密で、ウイグル民族の特色が散りばめられている。

陰陽五行思想は、中国古代哲学の重要な内容の一つである。モンゴル族、ナシ族など少数民族の中にも、五行説が流行していた。

十九世紀のモンゴル族の有名な思想家インジャンナシ（一八三七—九二）は、その『青史演義』の中でこう言っている。すなわち、この宇宙は天地日月から、ひ

いては万物まで、すべて陰陽二気に起源を持ち、五行法則によって形成された。それゆえ、世界はいきいきとし、万物が満たされている。万物が規律を持つている⁽¹⁶⁾と。インジャンナシのこの思想は、当時モンゴル社会に広く流行していた仏教の「虚空」理論と創世説に対して提出されたものである。彼は、宇宙万物が「陰陽二気に起源を持ち、五行法則によって形成された」とはっきり指摘したばかりでなく、また万物の運動には規律があつて、仏もまたこの規律に背くことはできないと強調した。

ナシ族の「精威五行」説は豊かな民族色を持っている。第一に、その記述の仕方と称谓方法が民族的特徴を持つていて、陰陽五行と呼ばず、「精威五行」と呼んでいる。『東巴経』を研究している学者によると、「精威五行」は、象形文字である『東巴経』の概念の特別の記述の仕方とその読み方の翻訳から来たもので、またそれを約束事と習わしによって、固有名詞として定着させたものである。次に、「精威五行」の内容と排列も、民族的特徴を持つている。五行の内容と排列は、中国

古代哲学と違っている。『洪範』は、水、火、木、金、土と言うが、「精威五行」では、木、火、鉄、水、土である⁽¹⁷⁾。これは言葉の表現方法が違うだけでなく、もつと重要なのは、自然物の性質と作用についての理解が異なっていることにある。最後に、その起源についての解釈に、さらに特徴がある。五行思想の起源については、中国古代哲学の基本的に二種の説き方がある。すなわち、「神賜」説と、五行は「氣」に源を持ち、古人の治水に関係した「演生」説に及んでいる。「精威五行」の起源説をこれと比べれば、豊かな地方色と民族的特徴が見られる。その起源については、『東巴経』の中に二種の説き方がある。

第一の説き方では、「精威五行」は黄金の神蛙が起源だという。この説き方も、青蛙が死んだ後、死体が化して万物が生じたという宇宙本源説から来ている。その具体的内容には、二種の伝説がある。一つは、「精威五行」は、「黄金の蛙が死んだ時の叫び声から来ていて、黄金の大蛙が死んだ時、続けて五回叫んだので、木、火、土、鉄、水の五行が生まれた」というものである。

もう一つは、「精威五行」は、黄金の大蛙が死んだ後、死体が化生したというものである。すなわち、「黄金の大蛙が死んだ時、蛙の毛が変化して東方の木になり、蛙の血が変化して南方の火になった。蛙の骨が変化し、西方の鉄になった。蛙の胆が変化し、北方の水になった。蛙の肉が変化し、中央の土になった⁽¹⁸⁾」と。

第二の説き方は、「精威五行」は自然生成説で、根元には氣があるというものである。自然生成説は『東巴経』に多く記載されている。例えば、「佳音と佳氣が結合し変化して、最初の精威五行を生み出した」というものもある。「天と地が変化し、緑色の木のような精威五行の木を、花火のような精威五行の火を、蟻の色のよくな精威五行の金を、卵黄のような精威五行の水を、老眼鏡のような精威五行の土を生み出した⁽¹⁹⁾」とも言う。これらの「精威五行」の自然産生論は、ナシ族の先民の氣本源説に関する思想の論理的発展であり、また素朴な唯物論思想の萌芽が深化し発展したものであることは、明らかである。

(八) 神創説

天地は何かによって始まり、万物はどこから来たのかという問題は、以上述べたような素朴で多彩な物質本源説と宇宙モデル論の他に、さらに各民族先民には、きらめくように天才的で知恵にあふれた創世説もある。

天神が世界を創造したという説が少数民族に流行したのは非常に早いし、流行した時間も久しく、影響も大きい。例えば、ハニ族には「天王」が世界を創造したという説がある。民間に流行している神話と史詩では、「天王が三人の大神を派遣して天を造り、九人の大神を派遣して地を造り、九千九百九十九年を造った⁽²⁰⁾」という説があり、チベット族には「ロラカウ神が天を引っ張り、サラカウ神が地を引っ張った」という説がある。『創世伝説』の中にはこう説かれている。すなわち、ロラカウ神が天を引っ張ったのでアーチ形になり、上の方になった。サラカウ神が地を引っ張ったので丸い形になり、下の方になった。天と地を「閉めた」時、天が地より小さくなって「どうしてもびったり閉められ

ない”。それで、地を天と同じ大きさにするため、力を入れて地を押し、とうとう天と地を閉め合わせた。地を押す時、地面のある所は膨れ、ある所は窪みが生じた。膨れた所は山坂や高地になった。窪んだ所は溝と谷、海になった⁽²¹⁾”というものである。リス族にはムプバ天神が世界を創造したという説がある。『創世記』はこう説いている。“伝えによると、はるか古代、天だけがあって、地はまだなかった。……天は浮かんでいる雲のようで、左右に揺れ、……いまにも落ちてくる危険があった。それで天神が天泥を背負い、それで地を造った⁽²²⁾”。史詩にも、天神が天に託して地を造ったことや、万物を創造したことがいきいきと描かれている。ラフ族にはウサが世界を創造したという説がある。『牡帕密帕』史詩ではこう説かれている。“昔々、ずっと昔、地もなければ、天もなかった。風も雨もなかった。日月星辰もなかった。昼と夜は分けられていなかった。東西南北が分けられていなかった。……ウサが足と手で泥を揉んで、金柱、銀柱、銅柱、鉄柱など四本の柱を造った。また四匹の大魚を造った……。魚の

背で柱を支え、また四本の天梁と地梁を立てかけ、天縁を天梁の上に置き、地縁を地梁の上に置いた。その時から天と地が分かれ、ウサは大変喜んだ⁽²³⁾”。このような創世神話はほとんどの民族にある。例えば、アチャン族にはツパマ天公とツミマ地母が世界を創造したという説がある。ミヤオ族にはルイカクヌという天神が世界を創造したという説がある。イ族にはカクズという天神が世界を創造したという説、衆神の王であるノカサボが天地万物を創造したという説、オンタイコジという神人と“四仙子”が天地万物を創造したという説、及びアテイという神が世界を創造したという説がある。ワ族にはリジという神が地を開き、ロアンという神が天を開闢したという説がある。ヤオ族にはミルタという神が世界を創造したという説がある。シユイ族にはハウという神が世界を創造したという説がある。コーオ族にはブスカクという神が天を造り、プビミという神が地を造ったという説がある。プーラン族には神であり、巨人のコミアと彼の十二人の子どもが天地を開闢したという説がある。ジンポー族には造

物主のニンカンワが世界を創造したという説もある。デーアン族には万能で知恵に富んだバダラン神が「阿祖茶葉（アソチャイエ）」を助けて世界を創造したという説がある。ナシ族にはトウ神、セウ神が世界を創造したという説がある。ペー族にはムスウエイ神自身が変わ化し万物を創造した⁽²⁴⁾”という説がある。この他に、北方の各民族には神秘的で豊かな創世説がある。

盤古が天地を開闢したという神話については、徐整の『五運歴年記』の中でいきいきと描かれている。“初めに盤古が生まれ、万古が死んだ後、死体が化生した。彼の気は風と雲に、声が雷雲に、左の目が日に、右の目が月に、四肢五体が五つの岳に、血が紅川に、筋脈が地に、肌が田土に、髪は草、毛は木になった。……身体にいた虫は風に吹かれ庶民になった⁽²⁵⁾”。わが国の少数民族にもこのような神話が多くある。例えば、ミヤオ族の『古老話』の中では、“盤古が天を開き、南火という人が地を開闢した⁽²⁶⁾”と言っている。トン族の『盤古開地』の中では、“こう言っている。盤古が天地を開闢し、天地が乾坤を生み、乾坤が万物を生み出した。

万物の中で人が一番利口である⁽²⁶⁾”。ヤオ族の『盤王図歌』の中ではこう言っている。

大きな峰はもとは盤王の骨であり、小さな峰はもとは盤王の身体であった。
 両目は日と月になり、鳥と動物の住む林ができた。
 気が風になり、汗が雨になり、血が川になり、
 それで万物には永久に生命がある⁽²⁷⁾。

このような神話はまだまだたくさんある。ペー族の『天地的起源』の中には、“誰が来て天地を開闢したのか、盤古が両兄弟を生んだ”などの話がある。つまり、わが国の多くの民族には、それぞれ程度こそ異なるが、盤古についての伝説が流行している。どの民族の神話が一番古いのか、筆者はまだはっきり考察していないので、あえて言うことはしない。袁柯はその『中国古代神話』の中で、“盤弧”の二字が、音が転じて“盤古”になったと言っている。その説によると、ヤオ族は盤弧を非常に敬虔に祀っていて、盤弧を盤王と呼び、人々は、すべてのことを盤弧に頼んで管掌させている。

徐整が『三五歴記』を書いた時、南方少数民族の“盤弧”伝説を撰取し、その上に古代経典の哲理と自分の想像を加えて、天地を開闢した盤古を創造した、と袁柯は考えている。⁽²⁸⁾ 筆者は、誰が誰の影響を受けたのか説明するより、このような神話が含んでいる豊かな想像性と哲理を説明するのが重要だと思ふ。これらの、違う形式で同じ内容を表現した神話は、創世神靈観の萌芽を表現したばかりでなく、物質本源説の萌芽状態の思想をも含んでいるからである。

龍造説は、わが国に広く流布している宇宙本源説の一つである。中国の古書は、龍について多く描いている。例えば、『山海経』(海外北経)には、龍を“身の長さは千里”とか、“人の顔をして、身は蛇で赤色の鐘山の神”とか、“名づけた燭陰、見ると昼になり、眠ると夜になる。息を吹くと冬になり、はき出すと夏になる。息は風になった”などと描かれている。『淮南子』(地形篇)は、龍を“人の顔をして、身は龍で、足がない”神と書いている。『太平御覧』、『太平広記』などの典籍にも、これによく似た記載がある。例えば、“伝えるとこ

ると、大昔、世間には一片の混沌とした霧だけがあつた。この霧は声も出さず、息もせず、何年を過ぎたか分からないが、とうとう果てしない大海になった。その中から、一匹の首と尻が見えない大魚が生まれた。この大魚が、世間に天もなく、地もなく、ひっそりしているのを見て、右鰭を上へ振つたら天になり、左鰭を下へ振つたら地になった。体を揺すつたら、背中から七組の神と一組の人が出てきた。⁽²⁹⁾ わが国の他の少数民族にも、このような伝説があるが、ここでははくくだすと述べない。

以上述べてきた神創説には、二つの特徴が目立っている。第一は、神と人との間にはっきりした境界がないことである。少数民族の史詩と神話の中の神は、しばしば人になぞらえられていて、具体的で、超人を感じさせる。あるいは、神はしばしば原始時代の労働者で、英雄を象つて美化されたものであり、自身の労働で世界を創造したことを、素朴で、幻想的に解釈し、また賛美するのである。それだから、これらの神は自由自在に風を吹かせ、雨を降らせることができないし、

ろによると、天門には日が輝いていて、そこまで行くことはできず、常に龍神は口から火を吐いている。この龍の名前は燭龍である。⁽²⁹⁾ などである。中国の少数民族にも龍についての伝説がたくさんあるし、またそれを宇宙本源説と関連させ、龍が天地万物を創造したという神話を多数形成してきた。例えば、ブイ族の『祭賽龍歌』の中に、“先輩の龍王が天を造つた。先輩の龍王が星を造つた。そのため天が明るくなった。星がこのようなにきらきら光るようになった”とある。“また龍神が田園を造り、龍神が村塞を造つたので、農作物は豊作だった”などと書かれている。⁽³⁰⁾ コーラオ族には、“張龍王が天を造り、李龍王が地を造つた”という神話がある。ミャオ族には“龍人”についての神話がある。これらの神話には、龍に不可能はないとか、天地万物の創造者であるとか、善の保護神であるなどという共通の特徴がある。

魚造説は、わが国のある少数民族では豊かな特色を持つている一つの宇宙本源説である。ハニ族の『天、地、人的伝説』はこう言っている。“伝えるところによ

事実でないことをでつちあげることできない。労働によつて天地万物を造るのである。以上述べた神話のように、宇宙万物は、すでにある物の助けを借りて神が創造した、あるいは、徳昂族の神話が言うように、神は「阿祖茶葉」(アソチャイエ)を手伝い、指示して万物を創造したものである。あるいは、イ族の史詩が言うように、宇宙万物は諸神と一緒に創造したり、あるいは、神は自分の器官で万物を創造したりした、などの話が語られるのである。これは宇宙万物の起源についての探求であり、また自身の労働に対する賛美と歌頌である。神と人との間にはっきりとした境界がない最も典型的な例は、ある民族の神話で神を普通の労働者として描いたことに見られる。例えば、ペー族の神話には、“盤古が二人の兄弟を生んだ。兄弟が毎日柴を刈つて母を養う”とか、“紅魚を釣つて市場で売る”といった話がある。⁽³²⁾ リス族のムブパ天神は父母と妻子を持つているばかりでなく、また生死もある。⁽³³⁾ そのため、彼らは万能ではない。例えば、ワ族ではこう言っている。すなわち、“リジ神が地を開き、ロアン神が天を開

き、ムイジ神が人を創造した。彼らは、天と地をつなげて造った。人を洞穴の中で造ったが、外へ出てこれないので、小鳥の助けを借りて洞穴から出した³⁴というものである。これは、この時期の先民は労働を基礎にして、視野をますます広くさせ、想像力を大幅に高めたことを説明している。ただし、抽象的な能力にはまだ限りがあつて、ある民族には「類」概念さえない。

第二は、神創説と物質本源説が混じっていることである。各民族の先民は、宇宙の本源を探求するのに、その初期段階では想像力と抽象的思惟能力がまだ充分に發展していなかったし、意識がまだ朦朧としていたため、彼らの宇宙本源の思想は徹底していなかった。この不徹底さは、物質本源説と神創説が混在することに主に表現されている。すなわち、少数民族の先民には、物質本源説は徹底していないし、神創説も徹底していないのである。その具体的表現は、次の点に見ることが出来る。神創説にあつては、神は時に、すでにある物質の助けを借りて、あるいは自身の器官で宇宙

万物を創造したという点である。物質本源説の中にも神創説の成分がある。例えば、タイ族の宇宙本源説では、気団と強風でエイバ神が形成され、後にエイバ神が天地万物を創造した。ヤオ族のミルタ神人は「風」で造られ、後に、風で成り立ったミルタ神人が宇宙の万物を創造した。また、ある民族では、盤古は「浮雲」から生まれ、後に盤古が宇宙万物を創造した、などの点である。それだから、この論の不徹底さの中には、物質本源説を主張する一方で、しばしば神の意識的な創造活動を伴っている。すなわち、唯物論の萌芽を孕んでいるし、唯心論の萌芽も孕んでいる。まさしくこの朦朧とした特徴は、初期哲学の「知識の索引」という特徴を孕んでいる。

二 中国少数民族の初期哲学における 宇宙観の特徴

中国少数民族の先民は、世界本源について、推測が幼稚で、取り留めがないにしても、人類の少年時代の思想は、この幼稚で荒唐な段階を経て来たのである。

その中に、人類初期の哲学的思惟の特徴を見るのは難しくない。

第一は、最も簡潔な言葉で宇宙本源の問題に答えていることで、また同時に、ただあるがままに答え、そのわけを答えていないことである。これは人類初期の哲学的思惟の一つの大きな特徴であり、また人類の思惟が極めて低い段階に置かれていたことの必然的結果である。原始の人類が宇宙の本源を探求した長い歴史過程で、科学形態の理論を出すのは不可能だった。彼らの宇宙万物についての認識は極めて浅く、実践の中では、自然的限界と社会的、生活的、そして生産的限界ははっきりしていない。認識の上では、肉体的なものと同霊魂的なもの、正確と錯誤、物質と精神、有神論と無神論とが混在している。二種はしばしば正確さと錯誤とが入り混じっている。これらが混じって「渾然一体」として原始意識を構成している。まさしくこの「渾然一体」とした特徴が、階級社会初期の文、史、哲の分野を分けず、巫と医を相伴い、自然科学との一体化という特徴をもたらしたのであつて、初期哲学の「知

識の索引」という特徴を決定づけた。

第二は、中国少数民族の先民の宇宙本源についての思想は、内容が豊富であるし、思想もめざましく、形式も多様なことである。各族の先民は宇宙の本源を探求する時、常に、彼らのよく知っているか、あるいは生産や生活に関係する具体的物質の形態で解釈し、充分に合理的に想像し、あるいは深く推測した。地域が異なり、生産と生活方式がそれぞれ違っているため、彼らの宇宙の本源についての探求は、豊富で多彩な内容を示している。以上に列挙したものに他に、チュアン族の「石本源説」、ナシ族の「陰陽説」、トン族の「樹苑説」、トロン族の「日月が交配して万物を生む」という説、そしてウイグル族の「四素説」、「四性説」などがある。たとえ同じ民族にしても、生活地域の違いや別の原因によって、多種の本源説がある。例えば、アチャン族には「混沌説」があれば、「白光説」もあり、「神創説」もある。ヤオ族には「浮雲説」があれば、「盤古が万物を生む」説もあり、ミラタが原始のものだという説もある。イ族には「霧露説」があれば、「彩雲説」

もあり、「混沌説」もある。また形式も多様である。古歌や叙事詩、それに哲理詩形式もあれば、神話、伝説や史詩形式もある。同時に、民間には諺、そして原始宗教の呪文と祈禱詞などの形式もある。中国少数民族の先民の宇宙本源についての推測は、思想の深さでも、内容の豊富さでも、表現形式の種類の多様性から見て、世界中のどの民族であれ、その同じ時期の思想と肩を並べられると言つても、いささかも誇張ではない。まさしく、この宇宙本源についての推測は、初期唯物論哲学の宇宙観の素朴な特徴を直接的にもたらした。すなわち、一種あるいは数種の具体的な物質形態で世界の本源を説明するのである。

第三は、中国少数民族の先民が宇宙の本源を探索して、いろいろと推測し想像した中には、素朴な弁証法思想の萌芽が豊かに充ちていることである。例えば、ナシ族の「佳音と佳気が合わさって万物を生んだ」という思想、シユイ族の「匹配成対」（対になって結びつく）、「各配陰陽」（それぞれ陰陽と結びつく）、「参差不齊」（まちまち）と「相依相靠」（互いに頼り合う）という思想、

第四は、人類の認識は直接的経験から来たということである。先民の時代は、生産力が極めて低い段階にあったので、人類の思维の発展も極めて限られていて、彼らは宇宙の本源を探索する時、しばしば自分のよく知っているか、あるいは自分の生産や生活に関係する具体的な物質形態から宇宙の本源を説明しようとしたが、その共通性を抽象して、その共通の本源説で宇宙の本源を説明することができなかった。例えば、ワ族の先民は、その史詩である『司崗里』の中で、リジ神とロアン神が天地を造つたと描いた後、次いで水牛、黄牛、馬、騾馬、豚、犬、鳥、および黒猿、鹿、虎、熊、鷹、蟻と山、木などを造つたと逐一述べた。つまり、彼らが知っている全部を列挙するばかりで、抽象したり、概括したりすることはできなかった。はなはだしいことに至つては、各種の鼠、例えば「勞合」（一種の小鼠）、「康弄」（一種の大鼠）、「司布瓦」（一種の大鼠）、「康布弄」（一種の大鼠）、「和得」（一種の大鼠）などをすべて一種類に概括することができなかった。これは一方で、先民の認識はまだ初級段階、事物の認識はまだ

イ族の「万物は動きながら生まれ、動きながら変化し、動かないと生み出さず、動かないと生まれぬ」とか、「万物が互いに結びついて繁榮する」という思想、プイ族の「清氣と濁氣が互いにおつかり」、清氣と濁氣が互いに貼りつき、そして「清氣と濁氣が互いに対立し、運動し変化して万物が生み出された」という思想、ミヤオ族の「霧露」が自然に変化したという思想、チュアン族の「気が激しい闘争を経て、運動し変化し万物を形成した」という思想、アチャン族の「陰陽が互いに生み、陰陽が相克し」万物が生まれたという思想など、このように各民族はすべて宇宙の発生、発展の思想などを共有している。これらの多彩な変化、発展の思想は、原始意識の直観的で、混沌としていて、気のおもむくままにいながら、しかも集団的である特徴をいっききと説明している。この思想は、千変万化する大自然の現象が先民の思想意識の中に直接的に反映されたもので、素朴な唯物論と弁証法の思想的萌芽が自然に結び合わさり、初期哲学の素朴唯物論と素朴弁証法の結合に導いたことは明らかである。

直観の浅い段階に限られているにすぎないことを説明している。一方では、彼らの認識はすでにある程度発展し、周りの事物の特徴を認識し始め、また周りの事物についての認識を基礎として、事物を区分し始めていた。例えば、神が人に「言葉」を与えたとか、水牛に「角」を与えたなどの表現で区分を行う。しかしながら、まだ「類」概念までは高まっていな。まさしく、人類の認識の萌芽段階におけるこうした特徴は、人類の認識の発展が直接的経験に起源をもち、かつこの感性的経験に基づく認識もまた層序があることを雄弁に説明している。

注

- (1) 『布依族古歌叙事歌選』、貴州人民出版社、一九八二年版、一八頁
- (2) 『董述戦争』、『崇撤図』、麗江県文化館石印本、一九六三年
- (3) 『巴塔麻棒尚羅』、雲南人民出版社、一九八九年版、第一一三章
- (4) 藍鴻恩「壮族神話簡論」、『三月三』第一期、一九八三年

- (5) 作家協会貴陽分会設立準備委員会編「苗族古歌・開天闢地歌」、「民間文学資料」第四編、一九五八年、一九二七頁
- (6) 中国民間文学研究会編「民間文学資料」第七十二編、一九五八年、八三頁
- (7) 『雀姆』、雲南人民出版社、一九八一年版、六頁
- (8) 『阿細的先基』、雲南人民出版社、一九七八年版、六頁
- (9) 「散文体人遮帕麻和遮米麻」、「山茶」第二期、一九八一年
- (10) 「散文体人遮帕麻和遮米麻」、「山茶」第二期、一九八一年
- (11) 『凉山彝文資料選訳』第一編、一一三頁
- (12) 土觀・却吉尼瑪『土觀宗派源流』、西藏人民出版社、一九八四年、一九六頁
- (13) 「祖先的伝説——達古達楞格萊本文」、「山茶」第二期、一九八一年
- (14) 『新訳簡注「蒙古源流」』第一卷、内蒙古人民出版社、一九九〇年版
- (15) 『西藏王統記』、商務印書館、一九四九年版、第一章柔巴依というのは、波斯詩歌から来た一種の詩歌の形式と韻律である。每首ごとに四行、a a b a という韻を押し詩体を指している。
- (16) 『青史演義』蒙文版、内蒙古人民出版社、一九五七年、七二頁
- (17) 李国文『東巴文化与納西族哲学』、雲南人民出版社、一九九一年版、第五章、原始精威五行を参照。
- (18) 李国文『納西族象形文字東巴經中的五行学説』、『中国哲学史研究』第二期、一九八六年
- (19) 李国文『納西族象形文字東巴經中的五行学説』、『中国哲学史研究』第二期、一九八六年
- (20) 中央民族学院少数民族古籍整理出版企画指導組事務室編『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）
- (21) 中央民族学院少数民族古籍整理出版企画指導組事務室編『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）
- (22) 『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）
- (23) 『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）
- (24) 『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）
- (25) 『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）
- (26) 貴州民族研究所編『民族研究參考資料』第十三篇、一九八二年
- (27) 肖万源等主編『中国少数民族哲学史』、安徽人民出版社、一九九二年版、一三六頁
- (28) 袁柯『中国古代神話（改訂本）』、中華書局、一九六一年版、三六一—三九頁
- (29) 『古微書』第三十二卷、「河图括地象」を参照。
- (30) 貴州民族研究所、貴州民族研究会編『貴州民族調查』第六、一九八九年、二九七頁
- (31) 『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）
- (32) 『中国少数民族神話汇編』（開天闢地篇）

- (33) 『保俵族民間故事』、雲南人民出版社、一九八四年版、一一三頁
 - (34) 『保俵族社会歴史調査』(二)、一六一頁
- (とう) とくとみ／中国・中央民族大学教授